

75歳から15歳へ 思い受け継ぐ

紙芝居で伝える平和



「紙芝居文化の会」では、演じ方も学び合う
—東京都武蔵野市、郭允撮影



まついのりこさん

昭和初期に日本で生まれたと言われる紙芝居。戦時下では、戦意高揚の道具にされた。そんな歴史を二度と繰り返したくないと、作家のまついのりこさん(76)らが、紙芝居を通じて平和の大切さを伝える活動を続けている。仲間の一人は15歳。思いを受け継がれていく。
(佐々波幸子)

今月7日、東京で開かれた「紙芝居文化の会」の会合で、代表のまついさんが戦争末期の体験を話した。

当時10歳。隣組で戦争を賛美する「羅漢紙芝居」を見せられた後、兵隊さんがお国のために頑張ってください。少国民も頑張りますと言われた。戦争に反対し学者の父が投獄された。親子で抗議活動をしており、その口にするのはつらかった。「顧客とコミュニケーションをとりながら演じることが、作品への共感が生まれるのが紙芝居。そこを悪用された」

まついさんは「じゃあじゃあひりひり」など80作近い絵本のほか、「ひらいた ひらいた」など19作の紙芝居を世に送り出した。『個性を育む紙芝居』と共感する感性を育む紙芝居。子どもも学ぶ必要。子どもも勇気を出して大空に羽ばたいていく。この内容のまついさんの作品からも、平和を願う思いが伝わってくる話。

り、泣いた。同じ病気の女性が出産したの記事を由佳さんから見せられ、今は気持ちが落ち着いている。「希望の光を届けることができるのが紙芝居。いつか私のように、悩んでいる子どもたちの前でも演じたい」

朝日新聞(朝刊) 二〇〇九年十月二十八日

紙芝居文化の会が、
新聞で紹介されました

新聞でも紹介された長岡由莉さんは、第三十回少年の主張三重県大会で優秀賞を受賞(文章は会報十五号に紹介)、さらに第三十二回では最優秀賞を受賞しました。
次の文章です。